モーツァルト室内管弦楽団　第170回定期演奏会

Mozart-Kammerorchester/ 170.Regulärkonzert

〈モーツァルトとハイドン〉その10

2016年6月18日（土）午後2時■いずみホール

Samstag, 18. Juni, 2016　14Uhr　Izumi Hall Osaka

■主催：モーツァルト室内管弦楽団　http://moz-kam.org

■協賛：いずみホール〔一般財団法人 住友生命福祉文化財団〕

■マネジメント：大阪アーティスト協会 TEL06-6135-0503/FAX06-6135-0504

Program

モーツァルト室内管弦楽団　第170回定期演奏会
Mozart-Kammerorchester / 170.Regulärkonzert
2016年6月18日（土）午後2時●いずみホール
Samstag, 18. Juni, 2016　14Uhr Izumi Hall Osaka

〈モーツァルトとハイドン〉その10

モーツァルト
Wolfgang Amadeus Mozart(1756-1791)

交響曲　第31番　ニ長調　K.297《パリ》
Sinfonie Nr.31 D-dur KV297 „Pariser Sinfonie"

Ⅰ. Allegro assai
Ⅱ. Andante
Ⅱ'. Andante（改作された第2楽章）
Ⅲ. Allegro

モーツァルト
Wolfgang Amadeus Mozart(1756-1791)

ピアノ協奏曲　第22番　変ホ長調　K.482*
Konzert Nr.22 Es-dur für Klavier und Orchester KV482*

Ⅰ. Allegro
Ⅱ. Andante
Ⅲ. Allegro ― Andantino cantabile ― Tempo I

＊　＊　＊

ハイドン
Joseph Haydn(1732-1809)

交響曲　第104番　ニ長調　Hob.I-104《ロンドン》
Sinfonie Nr.104 D-dur Hob.I-104 „Londoner Sinfonie"

Ⅰ. Adagio ― Allegro
Ⅱ. Andante
Ⅲ. Menuetto：Allegro
Ⅳ. Finale：Spiritoso

ピアノ：内田 聆子*／Klavier：Reiko Uchida*
コンサートマスター：釋　伸司／Konzertmeister：Shinji Shaku
指　揮：門　良一／Dirigent：Ryoichi Kado

Profile

内田聆子●ピアノ *Reiko Uchida, Klavier*

神戸女学院（現・大学）音楽学部卒業。山田康子、井口基成の両氏に師事。第19回毎日音楽コンクールピアノ部門第1位並びに特別賞後、各地労音例会やNHK「土曜コンサート」「夕べのリサイタル」、NHK-FMリサイタルに出演する他、妹小島準子との2台のピアノの演奏会を東京・大阪で開催。また、山田和男、朝比奈隆、森　正をはじめ著名指揮者のもと大阪フィルハーモニー交響楽団、京都市交響楽団、東京交響楽団、大阪NHK放送管弦楽団、テレマン室内管弦楽団、大阪シンフォニカー、ブルガリア国立トルブーヒン室内オーケストラ、アルカディア室内管弦楽団、モーツァルト室内管弦楽団等と協演多数。1955年大阪市民文化祭賞、1956年毎日音楽賞・新人奨励のための特別賞、1957年N.J.B.リサイタル賞、02年宝塚市民文化賞受賞。相愛大学音楽学部で長く教鞭をとりながら、精力的な演奏活動を展開し、2010年にはいずみホールにて音楽生活60周年記念リサイタルを開催。その後もリサイタルやコンチェルト、室内楽等、数多くの演奏活動を続け、近年は大阪フィルハーモニー交響楽団コンサートマスターの田野倉雅秋氏と首席チェロ奏者の近藤浩志氏との共演で好評を博している。相愛大学音楽学部名誉教授。日本ショパン協会関西支部理事、宝塚演奏家連盟運営委員。

門　良一

〈モーツァルトとハイドン〉

好評をいただいている〈モーツァルトとハイドン〉シリーズ、回を重ねて10回目となった。モーツァルトとハイドンという同時代でありながら互いに深く尊敬し合っていた二人の天才の作品の中から、何らかの意味で関連のある曲を比較演奏するというこのシリーズ、今回はモーツァルトの「パリ交響曲」とハイドンの「ロンドン交響曲」という2曲の「都市名付き交響曲」が選ばれた。パリとロンドンは現在もそうだが、18世紀当時はヨーロッパの2大音楽マーケットであり、われこそはと思う音楽家たちが集まる都市であった。モーツァルトは7歳の時、父親に連れられてパリからロンドンへの大旅行をし、各地で神童の名をほしいままにした。ロンドンで大バッハの末の息子、ヨハン・クリスティアン・バッハと出会い、その影響のもとに最初の交響曲(「第1番」)を書いたが、これをモーツァルトの「ロンドン交響曲」と呼ぶことがある。14年後、21歳で今度は父親の手を離れて再びパリに行くのだが、昔日の名声を呼び戻すことはできず、失意のうちに故郷に戻る。その折パリで作曲したのが今回演奏される「交響曲第31番《パリ》」である。この曲はパリの聴衆の大向う受けをねらって作られており、オーケストラ編成も大がかりなもので、曲の始まりもモーツァルトにはめずらしくパンチの効いたやり方になっている。この曲以後のモーツァルトの交響曲は10曲あってこれを「モーツァルトの後期交響曲」と呼んでおり、この《パリ交響曲》が彼の本格的な交響曲の最初の作品と言える。

ハイドンはモーツァルトと違い旅行らしい旅行はほとんどせず、30年近くハンガリーの貴族に仕えていたが、その作曲家としての名声はヨーロッパ中に轟いており、52、3歳の頃遠くパリから交響曲の注文が来るほどであった。この時作られた6曲からなる交響曲のセットがハイドンの「パリ交響曲」で、これはモーツァルトの〈3大交響曲〉に大きな影響を与えた傑作である。その後もヨーロッパ各地から作曲の依頼や楽長としての招聘が相次ぐのだが、ハイドンはハンガリーから動かず、ようやく主君の死によって楽長の職から解放され、それを聞きつけたロンドンのザロモンというヴァイオリン奏者兼興行師がハイドンをロンドンに呼んだのである。ハイドンは2度にわたってロンドンに行き、12曲もの交響曲(「ロンドン交響曲集」あるいは「ザロモン・セット」と呼ばれる)をその地で発表して空前の大成功を収める。本日の演奏会で演奏される通称「ロンドン交響曲」はその最後の作品である。ハイドンの作曲活動は弦楽四重奏曲とともに交響曲が中心であり、この「ロンドン交響曲」こそは彼の交響曲の集大成と言っていいだろう。

ヨーロッパ中を旅しながら成功を収めること少なく、若くして逝ったモーツァルト、晩年近くに大成功を収めたハイドン、この両者は全く対照的であるが、それぞれの「都市名付き交響曲」は両者のこの2大都市での過ごし方、ひいては両者の人生を象徴している名曲と言えると思う。

以下に述べるのは、モーツァルトの《パリ交響曲》に関連する二つの話題である。

・18世紀の聴衆のレベル

モーツァルトがパリから父親あてに書いた手紙を見てみよう。『ぼくはコンセール・スピリチュエルの開演用に、シンフォニーを一つ作らされました。それは聖体節に演奏されて、大いに喝采を受けました。(中略)最初のアレグロのまん中に、これはきっと受けると思っていたパッサージュが一つあったのですが(引用者注)、はたして聴衆は一斉に熱狂してしまいました。そして拍手大喝采です。でもぼくは、書いている時から、それがどんな効果を生むかを知っていたので、最後にもう一度それを出しておきました。それから、頭からの繰り返しです。アンダンテも受けましたが、最後のアレグロが特にそうです。この土地では最後のアレグロはみな、最初のアレグロと同じく、全楽器同時に、しかも大抵ユニゾンで始まると聞いていましたので、ぼくはそれをヴァイオリン2本だけでピアノで始めました。それも8小節だけです。その後にすぐフォルテが来ます。すると(ぼくが期待していたとおり)聴衆は、ピアノの時はシーッシーッと言っていましたが、それからすぐフォルテが来たのです。フォルテが聞こえるのと拍手が沸き起こるのと同時でした――嬉しさのあまり、ぼくはシンフォニーが終わるとすぐにパレ・ロワイヤルへ行って、上等のアイスクリームを食べ、願をかけていたロザリオにお祈りをしてから、家に帰りました。』(1778年7月3日付。「モーツァルトの手紙」(柴田治三郎編訳、岩波文庫、1980年)より)。コンセール・スピリチュエルというのは、パリにあったオーケストラで、その支配人であったル・グロの注文で《パリ交響曲》が作曲された。ちなみに、ハイドンが1785～6年に作曲した6曲の「パリ交響曲」はこれとは違う団体、コンセール・ド・ラ・ロージュ・オランピックからの注文によるものである。

この手紙を読んでどう思われるだろうか。驚くべきは、演奏の最中にリアルタイムで聴衆が反応していることである。現代におけるこれとやや似た現象はジャズの即興演奏のあとに起こる聴衆の拍手であろうか(かなり形式化してしまっているが)。18世紀の聴衆はそれほどレベルが高かったのだろうか。考えられることは、パリのような大都会でのオーケストラの演奏はモーツァルトの手紙にもあるようにかなりパターン化していて、聴衆もそれを承知で楽しんでいたので、モーツァルトがその裏をかいて効果を上げたということであろう。しかしここに書かれた聴衆の反応は現代では想像もつかない現象で、にわかには信じ難いものがある。モーツァルトは父親に、自分がパリで成果を上げているように見せたかったので、かなり誇張して表現している、という疑いはなくもないが、非常に興味深い。上記の手紙が、この旅行に同行した母親の死の直後に書かれていることを付記しておこう。

(引用者注)第1楽章の提示部の終わり近く、3連音符と2連音符の交錯した箇所(第105～118小節)と思われる。

・モーツァルト「とりかえばや物語」

《パリ交響曲》の第2楽章は、注文主のル・グロが「長くて繰り返しが多い」とクレームをつけたので、モーツァルトは別の第2楽章を書いた。モーツァルトの作品において同様の改作の例は他にもあり、ヴァイオリン協奏曲第5番K.219の第2楽章の改作として「ヴァイオリンとオーケストラのためのアダージョ」K.261、フルート協奏曲第1番K.313の第2楽章の改作として「フルートのためのアンダンテ」K.315が挙げられる。いずれも注文主のクレームに応じたものと推測され、長くて重めの曲から短くて軽いものになっている。18世紀においては、音楽作品は注文を受けて作曲されるので、注文主の意向は絶対であった。いかに注文主の要求に添えるかが作曲家の腕の見せどころであったのである。本日の演奏会ではまず他ではありえない珍しいことだが新旧の第2楽章が両方とも演奏される。注文主の要求に快く応じたモーツァルトのプロフェッショナル作曲家ぶりにご注目いただきたい。

■モーツァルト:交響曲　第31番　ニ長調《パリ》

この交響曲はメヌエット楽章を欠く3楽章形式である。ハイドンの確立した4楽章形式がモーツァルトにおいて定位置を得るのは、もっと後になってからである。第1楽章の始め方は、モーツァルトにしては(上品な言い方ではないが)かなりハッタリをかましたものとなっている。これは上記のモーツァルトの手紙にあるように、パリの聴衆の好みに合わせてのものであろう。この手法をモーツァルトは別の手紙の中で「プルミエ・クー・ダルシェPremier coup d'archet、最初の弦の一撃」と呼ばれていることを紹介している。「弦の」とあるが、上記の手紙にあるように、全楽器がユニゾンで奏する始め方のことである。そのような始め方とも相まってモーツァルトの交響曲では唯一フル2管編成(フルート、オーボエ、クラリネット、ファゴット、ホルン、トランペットがそれぞれ2本ずつにティンパニ1対、それに弦楽合奏)という大編成となっている。第2楽章ではこのうち、フルート1本、クラリネット、トランペット、ティンパニが休む小編成になる。本日は上述したように改作された第2楽章も演奏するが、編成はオリジナルの第2楽章と同じである。

■モーツァルト:ピアノ協奏曲　第22番　変ホ長調

1785年、モーツァルト29歳の作品。第23番K.488、第24番K.491とともに歌劇《フィガロの結婚》K.492と並行して作られている。ピアノ協奏曲のうちこれら3曲にのみオーケストラにクラリネットが使用されている。22番の作風は奇想天外なもので、モーツァルトが完全な「躁」状態にあった時の作品と言ってよいだろう。この協奏曲のオーケストラはクラリネットが使われているだけでなく、当時のオーケストラの中心的楽器であったオーボエがないのである。このことはモーツァルトがいかにクラリネットを愛好し、また重要視していたかを示している。さらにトランペットも使われているので、随所にブラスバンド的なサウンドが聴かれる。第2楽章では独奏ピアノが休んで、クラリネットを中心とした管楽器のみの長いパッセージがある。第3楽章は典型的なハンティング・ロンド(狩りのロンド)なのだが、まん中に後のオペラ《コジ・ファン・トゥッテ》の一場面にふさわしいような優美なメヌエットがあり、大変長いフィナーレとなっている。このメヌエット中間部の存在は9年ほど前に作られたピアノ協奏曲第9番K.271《ジュノム》と同じ形式であり、調性も同じ変ホ長調である。

本日の演奏会では今年86歳になられるピアニスト、内田胎子さんがこの協奏曲を演奏される。内田さんとは過去2回ベートーヴェンの協奏曲で協演しているが、今回はモーツァルトの第22番を選曲されたので私は大変驚いている。この曲は私のひそかに愛好する曲なので、内田さんとの協演を誰よりも楽しみにしている。なお、この協奏曲にはモーツァルトのオリジナル・カデンツァがないので、内田さんはリリー・クラウスのものを弾かれる。

■ハイドン:交響曲　第104番　ニ長調《ロンドン》

ハイドンとモーツァルトほど18世紀と現代での評価が違う組み合わせはないだろう。この〈モーツァルトとハイドン〉シリーズはそこに注目して、ハイドンの再評価を訴えようという意味を持っている。ハイドンをロンドンに招いたザロモンは、早くからハイドンの交響曲の信奉者であったが、彼だけでなくヨーロッパの多くの都市から作曲の依頼や楽長への招聘が絶えなかったのである。ハイドンは交響曲を100曲以上、弦楽四重奏曲を約70曲と、特定の分野での膨大な作品を残したが、そのことが今日の不人気の原因であるかもしれない(モーツァルトはピアノ協奏曲において、20数曲の作品を残したが、現在よく聴かれるのはそのうちの数曲に過ぎない)。しかし、それゆえにこそハイドンはその二つの分野においてそれぞれの様式を確立し、モーツァルトやベートーヴェンに引き継いだのである。

ハイドンは60歳近くになって2度にわたるロンドンへの演奏旅行を行って、大評判を得て同時に大金を手にし、成功者となった。モーツァルトとは正反対である。しかし、彼の成功は1曲1曲工夫を重ねて丁寧に作品を積み上げていく努力の賜物であった。モーツァルトとの出会いは彼のあり方を大きく揺るがしたが、彼の歩みはとどまることはなかったのである。最後の交響曲である第104番は、大らかでいさぎよく、全くハイドンらしい堂々たる風格を持っている。

ますます面白くなったモーツァルト室内管弦楽団 ～最近の演奏会から

横原千史(音楽学者・音楽評論家)

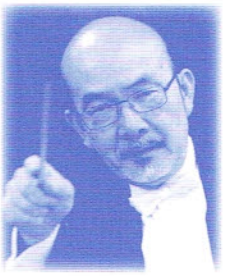
2016年、創立45年を超えたモーツァルト室内管弦楽団(MKJ)の演奏活動がますます面白くなってきた。最近の演奏会を概観してもその充実ぶりに目を瞠らされる。

まず昨年末の第167回定期(12月13日)は、フランス音楽特集で、フォーレの《レクイエム》がメイン。これが控え目ながら、優雅で上品で、フォーレにふさわしい名演であった。藤森亮一独奏のサンサーンス:チェロ協奏曲も生真面目でおとなしめであるが好演といえよう。普通は序曲かなんか軽い曲で始めるところを、ベルリオーズ:《キリストの幼時》抜粋を冒頭に置くところが面白く、この楽団の歴史の厚み(1992年に全曲を関西初演)も感じさせる。最近のアリアと協奏曲による特別演奏会(3月13日)も、よくあるような際物的なものではなく、盛りだくさんの中身の濃い夕べとなった。小谷朋子と池田堇のフレッシュなショパンとリストの協奏曲に、MKJの伴奏が充実していたプーランクの2台ピアノ協奏曲、池田洋子と奥村真理の味わい深い独奏が光ったモーツァルトの2台ピアノ協奏曲と、いずれも聴きごたえ充分であった。

何よりも素晴らしかったのが、《魔笛》を取り上げた第168回定期(1月10日)。いずみホールの《魔笛》は、昨年末東京中心の豪華キャストで上演されたばかり。それはそれでなかなか上出来の舞台で、感心もさせられたが、今回のMKJの《魔笛》はそれをはるかにに上回るものといっていいだろう。歌手の中で特筆すべきはパミーナの鬼一薫で、伸びのある透明な声は清純なこの役にふさわしく、それなりに良かった昨年の砂川涼子や最近の老田裕子(アンサンブル神戸、5月21日)を凌駕していた。松下雅人(ザラストロ)、四方典子(夜の女王)、西尾岳史(パパゲーノ)も素敵な歌唱を披露した。三人の侍女(津山和代、櫻井孝子、山田愛子)と童子(朴華蓮、山田千尋、麻生真弓)も美しいアンサンブルを聴かせてくれた(ちなみに昨年の童子はカウンターテノール3人というやや珍妙なものだった)。何よりも門良一とMKJの上質で、勘所を見事に押さえた解釈が、胸に迫る深い感動を呼び覚ましてくれた。今後の門良一とMKJの活動に注目すべきであり、実際、大いに期待できるだろう。

Profile

門　良一●指揮　*Ryoichi Kado, Dirigent*



1939年大阪生まれ。1962年京都大学理学部物理学科卒業、67年同大学院終了。京都大学オーケストラには学部、大学院を通じて10年間在籍し、フルート奏者、指揮者を務め、同オーケストラの発展に多大な貢献をする。また、客演指揮者の故近衛秀麿、故朝比奈隆、故岩城宏之、故若杉　弘、故奥田道昭、秋山和慶各氏等のもとで副指揮者を務め、薫陶を受ける。70年モーツァルト室内管弦楽団を創立、常任指揮者となり、同楽団を日本有数のプロ室内オーケストラに育て上げた。モーツァルト、ハイドン等の古典派の作品を35人の室内オーケストラで優雅に繊細に演奏する独自のスタイルを確立している。企画力にも優れ、モーツァルトの「予約演奏会の再現」やオペラ《イドメネオ》の世界初ノーカット上演などの大きな企画を成功させている。また、世界的名手との協演も多く、ピアノのマリア=ジョアオ・ピリス、シプリアン・カツァリス、ヴァイオリンのライナー・キュッヒル、ホルンのペーター・ダム等との協演においてはソリストの絶大な信頼を得て大成功を収めている。近年は古典派だけでなく前期ロマン派やフランス音楽においても、企画、演奏両面で注目すべき成果を上げている。アマチュアの指導にも熱意を持ち、京都産業大学神山交響楽団の音楽監督・常任指揮者を創立時より務めている。モーツァルト研究者として知られ、1982～2011年NHK大阪文化センター、1992～2011年同神戸文化センターにおいて「モーツァルトを聴く」の講師を務める。京都産業大学名誉教授。

モーツァルト室内管弦楽団　*Mozart-Kammerorchester Japan*

1970年に指揮者 門 良一によって設立され、45年間一貫して30数名のメンバー構成を維持するわが国では数少ない本格的プロ室内オーケストラである。レパートリーはモーツァルト、ハイドンを中心とした古典派からバロック、前期ロマン派に及び、最近ではフランス近代の作品にも手を伸ばしている。モーツァルトに関しては交響曲と協奏曲の全曲を演奏した日本唯一のオーケストラであり、創立当初から新モーツァルト全集に準拠した楽譜を使用していることは注目に値する。91年のモーツァルト没後200年に際しては2年にわたり記念シリーズを催し、なかでもモーツァルトの予約演奏会プログラムを完全に再現した日本初の企画は大いに話題を呼んだ。演奏スタイルは中規模編成の特色をフルに生かしたもので、的確なテンポ、明快なリズム、清澄なサウンドは定評のあるところである。関西一円で演奏活動を展開するなかで、90年からは大阪いずみホールを本拠として年6回の定期演奏会を開催。また隔年毎に東京定期演奏会を行い既に17回を数えている。海外では88年にはドイツ民主共和国文化省の招聘による旧東独国内への演奏旅行を成功させている。内外の著名アーティストと数多く協演しており、なかでもマリア・ジョアオ・ピリス(85、87年)、シプリアン・カツァリス(93、94年)、ペーター・ダム(83、86、88、98、00年)、ウィーンフィル木管アンサンブル(86年)、ライナー・キュッヒル(90年)らとの名協演はいまも語り草となっている。91年に姉妹団体、モーツァルト記念合唱団を誕生させ宗教曲等で活発に協演する他、93年には堺シティオペラの協力による〈モーツァルト・オペラシリーズ〉を開始し、いずれも好評をもって迎えられている。06年1月にはモーツァルト生誕250年記念特別企画としてオペラ《イドメネオ》の世界初オリジナル・ノーカット版演奏会形式上演を挙行し絶賛を浴びた。「素晴らしい成果」(毎日新聞)、「この楽団は注目」(朝日新聞)。07～09年全10回にわたる〈没後200年記念ハイドン・シリーズ〉を、09～11年全18回にわたる〈創立40周年シリーズ〉を、また10年からは〈ベートーヴェン・シリーズ〉を開催している。

●メンバー　　コンサートマスター　釋　伸司

第１ヴァイオリン	釋　伸司、本多　智子、稲庭真理子、松本　紗希、谷口　朋子、北村　奈美、森住　憲一
第２ヴァイオリン	中川　敦史、黒江　郁子、田原口安代、白水　響子、幣　晴代、清水めぐみ
ヴィオラ	道幸　明美、白木原有子、三上　哲、灘儀　育子
チェロ	日野　俊介、石塚　俊、尾崎　達哉、三宅　香織
コントラバス	南出　信一、北田　由美
フルート	大江　浩志、菱田　弓子
オーボエ	福田　淳、辨天　芳枝
クラリネット	髙橋　博、門　小夜子
ファゴット	佐伯　利之、倉橋　晴美
ホルン	岡田喜美子、垣本奈緒子
トランペット	大西　由起、中島　真
ティンパニ	泉　純太郎

インスペクター:中川　敦史　　ライブラリアン:本多　智子

＜川島多美子さんのこと＞

第2ヴァイオリンのメンバーであった川島多美子さんが去る2月10日亡くなられました。ちょうど1ヶ月前の第168回定期演奏会で、3時間にわたる《魔笛》の演奏を立派に務めておられます。モーツァルト室内管弦楽団には12年ほど前から参加され、その間レギュラーメンバーとして活躍されました。謹んでご冥福をお祈りいたします。

モーツァルト室内管弦楽団団員一同

モーツァルト室内管弦楽団 後援会

事務局 TEL06-6135-0503 / FAX06-6135-0504
大阪市北区天神橋3-3-3南森町イシカワビル5F 大阪アーティスト協会内

会　長　谷口 安平（京都大学名誉教授）
監　事　玉井 英二（三井住友カード特別顧問）
顧　問　伊藤 郁太郎（大阪市立東洋陶磁美術館名誉館長）　梅原　猛（国際日本文化研究センター顧問）
（50音順）

≪法人会員≫（50音順）

荒川化学工業	三孝社	住友倉庫	林六
関西電力	サントリーホールディングス	ダイキン工業	福山製紙
きんでん	新日鐵住金	高松建設	マキ工業
小林製薬	住友精密工業	中西金属工業	三井住友カード
阪野商店	住友生命保険	羽車	三井住友銀行

≪個人会員≫（入会順・敬称略）

深田晴世	藤原啓助	河渕清子	市崎英二	富田昭子
福岡隆子	馬場明和	佐竹時子	櫛木好明	土橋康男
梅原一哲	阪野和子	荒木陽子	加藤啓子	土橋瑞枝
石本三千也	和田暁夫	宮崎悦朗	続池美津子	富田茂利
岸田克己	桑名孝子	野口外志子	門謙二郎	森崎嘉之
梅村博也	石光正男	森本武	早川俊六	笠松義男
屋良卍佐治	髙杉方宏	小山浩	森原隆繁	米坂亨
國友正和	川島啓助	野原清秀	長谷登	太田真知子
稲垣千代子	中井武司	松井基純	冨田恭弘	富田久枝
浮田俊太郎	中井佐和子	松井香代子	乾賢次	和田みつ子
桑山弘	豊田成子	山本道子	井狩彌介	栢眞紀夫
三谷郁子	切畑敦詞	大磯隆一	井狩啓子	小早川清
三浦信一郎	三石武男	細井提吉	原田隆宏	金岡幸恵
水島敬夫	神林恒道	大原清司	村上小夜子	西野勇人
渡辺優子	杉浦和子	大原典子	東里香	久木山信光
平川美津子	野村透	山村哲夫	増見達生	中西彰
安藤邦洋	今井安男	速水洋紀	関英夫	中西規律委子
阿部由美子	玉手隆子	橋本博	曽我見郁夫	濵埼寛
中川泰幸	野崎志朗	梁瀬健	筑瀬重喜	上田成之助
村本孝夫	橋本靖昭	松山壽一	苧阪満里子	奥野哲久
松本幸道	有賀熙雄	松谷郁子	笠松規子	野村正朗
笹川忠士	佐野哲郎	山下鉄男	近藤康博	田中道子
緒林桂子	小柳陽一	萬野尊昭	松江忠二	釜江常好
碓井昭彦	田中四朗	八木孝昌	宇民正	東小夜子
長井重龜	島村猛	松田富久子	高松孝之	三宅晴久
岸田多門	松井とも子	西垣真理子	後藤喬雄	早山雅子
能田豊	得田栄蔵	榎原良行	今西三郎	久木山よりこ
宮井茂治	菱谷勝次郎	渡辺義明	今西道子	匿名　2名
祐野尚子	豊田紘生	小川雄介	島村須美子	
金定秀光	飯田祐子	能田久美	青山由子	
金定嘉也子	宮井芳子	河井洋子	那須市子	
菅正徳	塩脇昭司	宮北浩司	国分妙子	
日高穂	塩脇祥子	奥村一二	文野彰蔵	

会　費・個人会員につきましては年会費1口2万円です。　・法人会員につきましては年会費1口10万円です。
会員の特典・年間6回の自主公演にご招待致します。（1口に付き個人各1枚、法人各5枚）
・ご同伴者は10%割引となります。
・関連演奏会のご案内またはご優待を致します。
・定期演奏会プログラムにご芳名を記載させていただきます。
・会報「ディヴェルティメント」をお送り致します。